

牧口常三郎とジョン・デューイ

伊藤 貴雄

1 はじめに

本日は、この記念すべきシンポジウムで発表する機会をいただき、まことにありがとうございます。私からは、牧口常三郎（1871-1944）とジョン・デューイ John Dewey（1859-1952）の学問の関係性について簡単に報告したいと思います⁽¹⁾。

とは申しまでも、牧口は1871年生まれ、デューイは1859年生まれであり、両者は日本とアメリカという遠く離れた地に生き、しかもデューイが生前に牧口の名を知ることはありませんでした。また、牧口は確かにデューイの存在を知ってはいましたが、現在出版されている『牧口常三郎全集』（第三文明社、全10巻）におけるデューイへの言及箇所は全部で6つであり、これは他の哲学者や教育学者への言及——たとえばデュルケムやヘルバルトやカントへの言及——と比べるとかなり少なく、デューイからの影響を過大視することには問題があります。

しかしながら、すでにデューイ研究センターのラリー・ヒックマン所長や創価学会インターナショナルの池田大作会長によって指摘されているように、両者が様々な共通点を有していることもまた否めない事実であります。これまで指摘されている主な共通点としては、牧口とデューイがともに、教育の目的を子どもの幸福であるとしたこと、新しい価値を創造できる人間の育成を目指したこと、教育において生活が果たす役割を重んじたこと、今日という地球市民の輩出を心掛けていたこと、等々があります⁽²⁾。

そこで考えてみたいのは、何ゆえに牧口常三郎とジョン・デューイはこのように類似した思想を持つに至ったのか、ということです。必ずしも明確で多大な影響関係があったとは言えないにもかかわらず、幾つもの共通点が見られるのはなぜなのか。本日私に負わされた課題は、牧口の著作におけるデューイへの言及箇所に拠りながら、両者の関係を追跡し、この問題を考えることです。

(1) 本稿は、2006年10月14日に中国・武漢の華中師範大学で行われた「調和社会と調和世界——池田大作思想国際シンポジウム」での発表原稿である。発表時間の制限もあり、概説的論考にとどめざるをえなかったことが残念である。本稿主題に関する本格的論究は他日に期したい。

(2) 池田大作『『地球市民』教育への一考察——コロンビア大学ティーチャーズ・カレッジ講演』（『創立者の語らい 記念講演編Ⅲ』創価大学学生自治会編、2004年、81-103頁）、ラリー・ヒックマン「民主主義・教育・価値創造」伊藤貴雄訳（『東洋学術研究』第42巻第1号、2003年、109-126頁）を参照のこと。

2 初期牧口とデューイ

牧口の最初の公刊論文は、「観念類化作用」（1896年）と題し、26歳のときのものです。このなかですでにデューイに関する最初の言及がなされています。牧口はアメリカの教育学者ド・ガーマCharles De Garmo (1849-1934) の『俄氏新式教授術』*Essentials of Method* (1890) から長文の引用をしているのですが、実はその引用文のなかにデューイの文章が出てくるのです。つまり、牧口はド・ガーマが引用したデューイの文章を重ねて引用したわけです。ド・ガーマはアメリカのヘルバルト協会の会長も務めた当時の代表的なヘルバルト主義者です。彼は『俄氏新式教授術』のなかで、デューイが28歳で著した『心理学』*Psychology* (1887) から一節を引用し、デューイをヘルバルト主義の心理学者として位置づけています。その引用されたデューイの文章とは次のようなものです。

「新しい事物が意識界に入って認識されるのはどういう場合であるか。それは、その新しい事物が、私たちのすでに持っている様々な経験と、秩序ある方法によって結びつけられたときである。他のものと調和せず、互いに結びつくことのない知識は、全く意味をもっていない。そういう単独のものは知識の目的ではないのだ」⁽³⁾

このデューイの文章をヘルバルト主義教授学理論の一例としてド・ガーマは引用し、さらにそれを牧口が引用したのです。この時期、牧口はヘルバルト主義教授学の深い影響の下にありました。なかでも、観念の「類化」——英語ではAperceptionといいます——という理論に注目していたのです。類化とはどういうものかといいますと、既知の観念によって未知の観念を習得すること。これまで自分が持っていた知識によって新しい知識を獲得していくこと。これが「類化」です。この類化論に関する研究書として牧口はド・ガーマの本を引用し、そのなかにデューイが引用されていたわけです。したがって、牧口とデューイとの最初のつながりはヘルバルト主義教授学における類化論であったのです。

牧口が類化論に着目した理由は、論文「観念類化作用」の結論部分に述べられています。

「教授の最終目的である道徳的陶冶を達する唯一の要件は、実に興味にあるのである」⁽⁴⁾

ここで牧口は、教授における最大にして唯一の要件として、子供たちの興味を喚起することを挙げています。そして、興味を起こさせる上で方法論的に重要なことは、類化を基本にすることだと述べています。そのような理由から、牧口は類化論を取り上げていたのです⁽⁵⁾。

⁽³⁾ John Dewey, *Psychology*, New York: Harper & Brothers, 1894, p. 85. 牧口による引用箇所は、『牧口常三郎全集』第7巻（第三文明社、1982年）148頁にある。

⁽⁴⁾ 上掲『牧口常三郎全集』第7巻、149頁。表記は現代語訳してある。以下同じ。

⁽⁵⁾ 牧口教育学の形成に果たした類化論の意義については、拙稿「J・F・ヘルバルトの類化論と初期牧口思想の形成」『東洋学術研究所紀要』第16号、2000年、150-167頁）を参照のこと。

この論文は1896年のものですが、実はデューイも代表作『民主主義と教育』*Democracy and Education* (1916) のなかで、ヘルバルト主義教授学、とりわけその類化論を評価しながら、教育においては子供たちの興味を喚起することが大事なのである、と述べています。デューイはヘルバルトの理論一般に対しては、それが静的staticなものであり、動的dynamicな知識獲得の面を見落としていると批判していますが、類化論のことはおおむね高く評価しています。デューイがこのように類化論を『民主主義と教育』のなかで重要視し、活かしていたことを我々は見落としてはならないと思います。また、牧口も後には『創価教育学体系』(1930-34年)のなかで類化論をふたたび主題化することになります。それゆえ、デューイも牧口もともに教育学者としての出発点がヘルバルト主義教授学であり、それがデューイにおいては『民主主義と教育』、牧口においては『創価教育学体系』と、それぞれの代表作のなかで結実した、ということをお我々は確認できるのです。

初期の牧口思想のなかで、デューイとの関係をうかがわせる手がかりがもう一つあります。これはデューイについて直接言及したものではありませんが、牧口が30歳のときに書いた「パーカー氏の所謂学校に加ふべき社会的趣味の意義如何」(1897年)⁽⁶⁾という論文です。これはアメリカの教育学者フランシス・W・パーカーFrancis Wayland Parker (1837-1902)の教育論を紹介したのですが、ここで牧口はパーカーを高く評価しています。パーカーはアメリカにおける新教育運動のリーダーとして知られていますが、伝統的な教育と来るべき民主的な教育とを比較して論じた人物です。ここでいう伝統的な教育とは、いわゆる詰め込み教育です。これに対して民主的な教育とは、学校生活を民主主義実践の場ととらえて、学習活動と授業方法を民主的なものにしていくというものです。パーカーはそのような観点から学校教育と民主主義とのつながりを論じています。ここで興味深い点は、このパーカーの民主教育運動を受け継いで発展させた人物がデューイであるということです。

さて、牧口の論文で注目しておくべき点は、学校の役目は子供たちに「円満なる共同生活」の基礎を作らせることであるというパーカーの説に、牧口が賛同していることです。その際、学校は家族と社会との中間にあるため、家族関係の延長線上にあつて、しかも社会の一員として生きていく民主的な姿勢を見につける場が学校であると位置づけられています。このパーカーの思想が後にデューイの『学校と社会』*The School and Society* (1899) や『民主主義と教育』に受け継がれていったこと、そして、若き日の牧口がパーカーに賛同していたことを考慮すると、牧口が後々デューイにも共鳴することになった思想的背景を理解できると思います。

*

以上、初期の牧口がヘルバルト主義教授学の類化論、およびパーカーの社会的教育論を学んでいたこと、そこに早くもデューイとの関係性を見出すことができることについて述べました。次に、このことが牧口教育学のなかでどのような特徴となって活かしているかということについて言及したいと思います。

⁽⁶⁾ 前掲『牧口常三郎全集』第7巻、257-264頁。

先にも述べましたように、類化論の根本的な思想は、自分が持っている知識を基にして、新しい知識を獲得していく、というところにあります。牧口はこれをベスタロッチ教授学と結びつけて、「身近なところから遠くへ」という原則が教育では非常に大事である、と述べています。子供たちはまず身近なところを主題にして基礎的な学習をする必要があるのです。勉強の場であれば学校、生活の場であれば郷土、そうした子供たちの日常と密接な環境において基礎的な学習をすること、すなわち社会や国家の基本的な構造を認識すること、それがまず大事である、というのが牧口教育学の理念になっていきます。

この点がまた、パーカーの社会的教育論と結びついていきます。つまり、学校は小さな社会であって、ある意味で民主社会の縮図である。したがって子供たちは、家族的な人間関係の延長として、学校という小社会のなかで人間関係を学び、それを基点にして社会や国家の基本的な構造を学んでいくことになるのです。このように、ヘルバルトの類化論とパーカーの社会的教育論とをワンセットとして牧口はとらえていた、ということが出来ます。牧口は教授の目的を「興味の喚起」であり、学校生活の目的は「円満なる共同生活」の基礎を身につけることである、と考えていたのです。以上の思想が牧口教育学の基礎となっていきました。

当時の日本の一般的な教育界では、明治天皇が発した「教育勅語」（1890年発布）のなかにある「(天皇に対しては) 克ク忠ニ」「父母ニ孝ニ」という、「忠」と「孝」の二つを大きな柱としていましたが、その後軍国主義が強まるにつれて「孝」が置き去られ、「忠」が前面に出てくるようになります。つまり、親への孝行よりも、天皇への忠誠が重要だとされていったのです。この動きに対して牧口は一貫して反対していました。たとえば牧口は、先に述べた「身近なところから遠くへ」という教授学の原則に従い、子供たちがまず学ぶべきは両親への孝行であって、最初から天皇や国家への忠誠を教え込むのは非合理的で間違っていると、初期の論文「社会的教育学の実地的方面」（1901年）⁽⁷⁾のなかで述べています。ここで牧口は、教育勅語を子供たちにどんなに植えつけたところで子供たちが「円満なる共同生活」を築いていくきっかけにはなりえない、あくまでも身近な人間関係の構造を基点にして、社会や国家の基本的な構造を理解することが重要なのである、ということを説いています。

若き牧口がこのように述べてから約20年後の1919年、デューイは来日しました。デューイは、日本政府が教育勅語を用いて“天皇中心の神の国”という思想を子供たちに植えつけているのを目の当たりにし、この教育がやがて軍国主義の温床になるのではないかと懸念を表明していました。デューイのこの懸念はおそらく牧口も共有していたものであろうと考えられます。

3 中期牧口とデューイ

次に、中期の牧口に話題を移したいと思います。ここでいう「中期」とは、牧口が40代から50代にかけて書き溜めたメモを基礎にして、60歳前後の頃に発刊した『創価教育学体系』を指します。そのなかにデューイからの引用が2箇所あり、いずれもが初期牧口のなかで確認したデュー

⁽⁷⁾ 同上、361-366頁。

イとのつながりを継承するものです。まず牧口は、『創価教育学体系』第1巻（1930年）の第2篇第2章「教育の目的としての幸福」の冒頭で次のように述べております。

「教育の目的であるべき文化生活の円満なる遂行を、如実に言い表す言葉は幸福以外にはないだろう。

[……] 教育者や教育を希望する父兄が、自分の生活の欲望のために、子供たちを手段とするのではなく、子供たち自身の生活を教育活動の対象となし、彼らの幸福を図ることをもって教育の目的とするのである。[……] ジョン・デューイ氏が『生活のために、生活において、生活によって』といったのは私たち教育者の味わうべき言葉である」⁽⁸⁾

ここで引用されているデューイの言葉は『学校と社会』にある一節です。デューイの言葉を正確に引用すると、「生活することが第一である。学習は生活することをとおして、また生活することとの関連においておこなわれる」⁽⁹⁾ というものです。

先の文章につづけて牧口は、自分のいう「幸福」の内容について、「円満なる社会生活」が不可欠の要素であると定義しています⁽¹⁰⁾。つまり、社会の一員として人々と苦楽をともにしながら社会の発展に貢献していける人間であること、これが牧口のいう幸福の内実です。ただいま「円満なる社会生活」という表現が出てきましたが、これは先に述べたパーカーの「円満なる共同生活」という言葉の言い換えであることは言うまでもありません。アメリカではパーカーの理想はデューイに継承されていったわけですが、牧口も、パーカーの思想である「円満なる共同生活」がデューイの『学校と社会』の思想と合致しているということ、『創価教育学体系』で述べているのです。牧口がパーカーとデューイとの関係をどこまで知悉していたかということについては、これ以上定かではありません。しかし少なくとも、パーカーとデューイの目指したものがともに、民主社会の縮図としての学校——すなわち学校は一つの生活の場所であり、子供たちは学校において、社会で生きていくための基本的な素養を身につけていくのである——という思想だったことを、牧口は確実に理解していました。

ここで一度デューイにおける「社会」の定義を確認しておきたいと思います。デューイが理想としていた社会とは、人々が共通の目標に向かって、協同で活動を行い、主体的に参加するという民主主義の場でした。そして学校そのものを小型の社会、つまり繰り返しになりますが、民主社会の縮図にしていくことが大切であるとしてきました。このデューイの社会の定義は、牧口の社会の定義とも重なっています。牧口は『創価教育学体系』第2編第3章「教育目的と社会」のなかで、自身の若き日の著作『人生地理学』（1903年）を引用して「社会」を以下のように定義しています。

⁽⁸⁾ 『牧口常三郎全集』第5巻、第三文明社、1982年、124頁。

⁽⁹⁾ John Dewey, *The School and Society*, Chicago: The University of Chicago Press, 1910, p. 53. 訳文は宮原誠一訳『学校と社会』岩波書店、1957年、47頁による。

⁽¹⁰⁾ 前掲『牧口常三郎全集』第5巻、131頁。

「社会とは共通の目的をもって、より長期的な精神的関係を持ちながら、一定の土地に集まって、一緒に生活していく人々の共同体であると定義できる」⁽¹¹⁾

これはまさしくデューイが『学校と社会』で定義している内容と重なりますし、この意味での社会の縮図が学校である、ということになります。こうした牧口の思想が『創価教育学体系』のなかでいかなる役割を果たしたかについて、もう少し述べておきます。

牧口が生きていた時代の日本では、まだ「民主主義」という用語が政府から使用を許されておらず、代わりに「立憲主義」という用語を使わねばならなかったのですが、牧口はこの「立憲」という用語を『創価教育学体系』のなかで26回使っています。とりわけ、立憲主義が最も政治的な危機に瀕した時期に『創価教育学体系』第3巻（1932年）を発表し、学校は立憲政治の縮図である、ということを述べています⁽¹²⁾。牧口によれば立憲政治とは、お互いに意見を出しながらよりよい社会を目指していく体制のことです。教師一人ひとりがよりよい社会のあり方を模索する人間でなければならず、また子供がそのような思考力・実践力を身につける場所が学校である、と牧口は考えていました。ところが当時の日本は、自由な言論や議論が少しずつ圧殺されていく時代状況にありました。改めて確認する必要はないとは思いますが、日本は1931年に満州事変を起こして十五年戦争に突入し、軍国主義の度を強めていきました。その渦中であって牧口がデューイの思想に共鳴していたことは十分に理解できることです。

その証拠に、牧口がデューイに言及した文章がもう一箇所、『創価教育学体系』第4巻（1934年）に見られます。そこで牧口は次のように論じています。

『改革しなければならないのは、教育の方法よりは態度である。』[……] 教育の材料である知識を詰め込みさえすれば、自然と教育ができあがるとしていた時代はとっくに過ぎ去ってしまった。そして教材をうまく使って、子供たちが知識を獲得していくことを指導していくのが教育の本質なのであるということが認められるようになった。[……] ところが、ここからもう一歩進んで考えてみると、子供たちに知識を獲得させる指導を任せられた教育者は、人を教える方法を講じる前に、自分自身の教育方法を工夫することによってまず手本を示すことがより大切なのであるといえる。したがってその研究方法の根底をなす教師の態度こそ、まず省察されなければならない問題になってきたのである。このことはアメリカの教育学者ジョン・デューイ氏もその著書のなかで強く主張しているのである⁽¹³⁾

これもまたデューイの『学校と社会』に関する言及です。デューイが学校教育の成否は教師の研究姿勢にかかっていると述べたことに対し、牧口が共感していたということが、この文章からうかがえます。日本が軍国主義の色彩を強めつつあるなかで、リベラルな教育論を説く『学校と

⁽¹¹⁾ 同上、148頁。

⁽¹²⁾ 『牧口常三郎全集』第6巻、第三文明社、1983年、159-165頁。

⁽¹³⁾ 同上、320-321頁。

社会』への共鳴を表明したということは、『創価教育学体系』という書物が日本社会のなかで持っていた政治的意味を自ずと浮かび上がらせています。なお、時間の都合で今日は詳述できませんが、1936年に月刊誌『新教』3月号に掲載された論文「教育の態度を論ず」のなかでも、教師の研究姿勢を論じたデューイのことが取り上げられています⁽¹⁴⁾。

4 後期牧口とデューイ

時間が迫ってまいりましたので、最後に後期の牧口について述べたいと思います。晩年にも牧口は、「生活のために、生活において、生活によって」教育が行われるというデューイのテーゼに言及しております。それは太平洋戦争が始まった翌年の1942年に開催された創価教育学会の会合での発言であり、『大善生活実証録』と題する小冊子に収められました。

「生活法は生活してみなければわかるものではない。アメリカの実用主義の哲学者ジョン・デューイの生活法は生活において生活によってわかるといったのは疑ってはならない真理である」⁽¹⁵⁾

学問や知識というものは生活という行為のなかで獲得され認識されていくものである、という牧口の往年の教育思想が、ここではデューイを通じて語られています。当時の日本においてはすでにアメリカ、イギリスといった国々是对戦国でしたので、国名をあげるだけでも非常に危険視される状況下にありました。そのなかで牧口はアメリカの哲学者ジョン・デューイの主張は真理であると言い切りました。そしてこれが牧口の最後の講演となりました。こうしてみると、牧口は最初の公刊論文（「観念類化作用」）でデューイに言及し、最後の公開講演でもデューイに言及したということになります。そこで一貫しているのが、「身近なところから遠くへ」という教授学理論であり、その延長線上にデューイのプラグマティズム（実用主義）というものを捉えていました。教育的実践であれ、宗教的实践であれ、要するに身近な生活のなかで知性を陶冶していくこと、真理を探究していくことを重視していました。

このように一貫して牧口はデューイと相通するリベラルな思想的立場をとっていましたが、この立場が最終的に日本の軍国主義とどのように衝突したか、ということを確認して今日の報告を終えたいと思います。

牧口は1943年7月6日、静岡県で特別高等警察（特高）によって検挙されますが、この警察が発行していた『特高月報』の1943年7月分を見ると、検挙の理由の2点目に、牧口が教育勸語批判を行なったことが挙げられています⁽¹⁶⁾。すなわち、牧口は1941年秋に福岡で、教育勸語にある「克ク忠ニ」という箇所を批判しております。「克ク忠ニ」という言葉は、いかなることがあつ

⁽¹⁴⁾ 『牧口常三郎全集』第9巻、第三文明社、1988年、8頁。

⁽¹⁵⁾ 『牧口常三郎全集』第10巻、第三文明社、1987年、154頁。

⁽¹⁶⁾ 『特高月報』昭和18年7月分、文部省警保局保安課、1943年、127-128頁。なお、牧口が検挙された理由と背景に関しては、拙稿「牧口常三郎は国家政策の何に抵抗したか」（『創価教育研究』第3号、2004年、115-136頁）を参照のこと。

でも天皇に忠実であれ、という意味であり、当時出版されていた教育勅語の解説本によれば、戦時には命を捨てて天皇のために戦いなさい、ということの意味していました⁽¹⁷⁾。ところが牧口は、「克ク忠ニ」ということを天皇が言うべきではないと発言し、これが警察にいらまれて検挙のきっかけの一つになったのです。そして同年8月分には、警察による調書が、「創価教育学会会長牧口常三郎に対する訊問調書抜粋」と題して掲載されています。

そのなかで牧口は、「被疑者（＝牧口）は学会の会員其他に対し教育勅語の『克ク忠ニ』と謂ふ事を天皇陛下が臣民に仰せられた事でない」と説明して居るが、如何なる理由なりや」との警察の問いに対して、こう答えています。

「教育勅語の中に、親に対しては『父母ニ孝ニ』と明示してありますが、陛下御自ら臣民に対して忠義を尽くせと仰せられる事は、却而陛下の御徳を傷付けるもので、左様に仰せにならなくても日本国民は、陛下に忠義を尽くすのが臣民道であると考へます」⁽¹⁸⁾。

これは特高警察を前にしての発言ですから、牧口が天皇を直接に批判するのではなく、一流の皮肉をこめて応答していることを我々も理解する必要があります。牧口の真意は、先に紹介した初期の論文「社会的教育学の実地的方面」に照らすと明確になります。

つまり牧口は、天皇が国民に向かって「父母に孝行せよ」というのは構わないが、「天皇に忠実であれ」というのは教育的見地からいって非合理的であると述べているのです。このように牧口は、若き日から学んできたヘルバルト主義教授学やパーカーの社会的教育学に基づき、身近なところから出発して社会や国家を理解していくことが大事である、そのさい学校は重要な社会の縮図となっているのである、という思想を最後まで貫いていたのです。それゆえに牧口は日本の軍国主義思想と真っ向から衝突し、最終的に獄中の人となったのでした。

*

以上、簡単ではありましたが、牧口常三郎がジョン・デューイについて言及した箇所を年代順に辿りつつ、牧口が若き日から最期まで一貫して民主的な教育思想を持ちながら、デューイに対する敬意を表明していたことを確認しました。そして、牧口のその姿勢が軍国主義との衝突をもたらしたのだということが、多少なりとも文献的に跡付けられたのではないかと思います。以上で私からの報告を終わります。ご清聴ありがとうございました。

⁽¹⁷⁾ 峰間信吉編校『教育勅語衍義集成』東京学友社、1937年、27頁。また、文部省発行『臣民の道』1941年、51-52頁や、『初等科修身 二』1942年、7-9頁に同様の趣旨が記されている。詳細は上掲拙稿を参照のこと。

⁽¹⁸⁾ 『特高月報』昭和18年8月分、文部省警保局保安課、1943年、153頁。